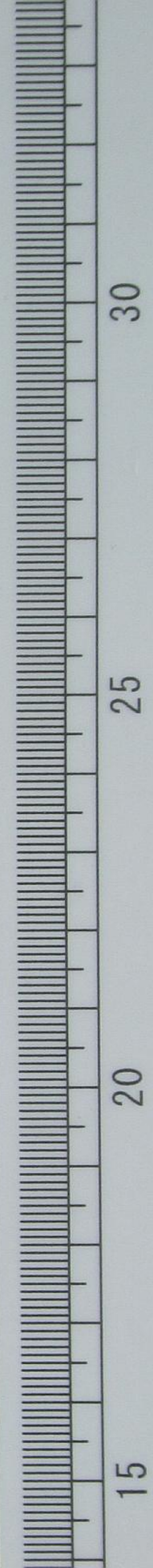


櫻雨園主人綴

上



15

20

25

30

初編
上と巻

西洋床
桜雨園
美人鏡
冷光画

金松堂
梓

鳥が啼く吾妻男は京女郎と氣象と奇麗と比較し由今へむじ
 の諺よと開けゆく世の面白さへ自然は變る時の流行実よ
 や横濱開港より算へむ丁度二十餘年天窓の飾り衣類の摸
 様も昨日の新規へ今日より後より備繁忙しい浮世の有さま茲
 より眼を著たる時より人へ何より天窓形と彼の洋風よ倣ひ
 たる理髪天窓の格好と各國とも承知して腕のさくる浅床が
 店よ入来る客の咄と種よ時付し故人三馬が尻馬よ乗地よ誌ま
 西洋床浮世床よ及むとむ牧と放と若駒の拙き筆とか見
 捨るく春風誘ふ青柳の絲より長く御評判と乗出を駒よ由縁
 たる伯樂街の裏合せ金松堂の主と共に只管仰ぎ稟まよふん

明治十四年四月

松村春輔誌

新聞記者
中目薫



銀行小管
戎谷朝治



野村
櫻川爪八



旅俳優
市川團五郎



梅柳らぞ若衆の如女哉

とて西洋床は不向の

口吟理髪天窓よ

香水の

柳の

絲よ

梅花と咲せ

風は吹とて薫るが如し

復王椿の白ひ油へ八千代の

春ま心髪の色と艶とを操と見えべ



明治 東京西洋床初編上 一名怪化噓競

東京

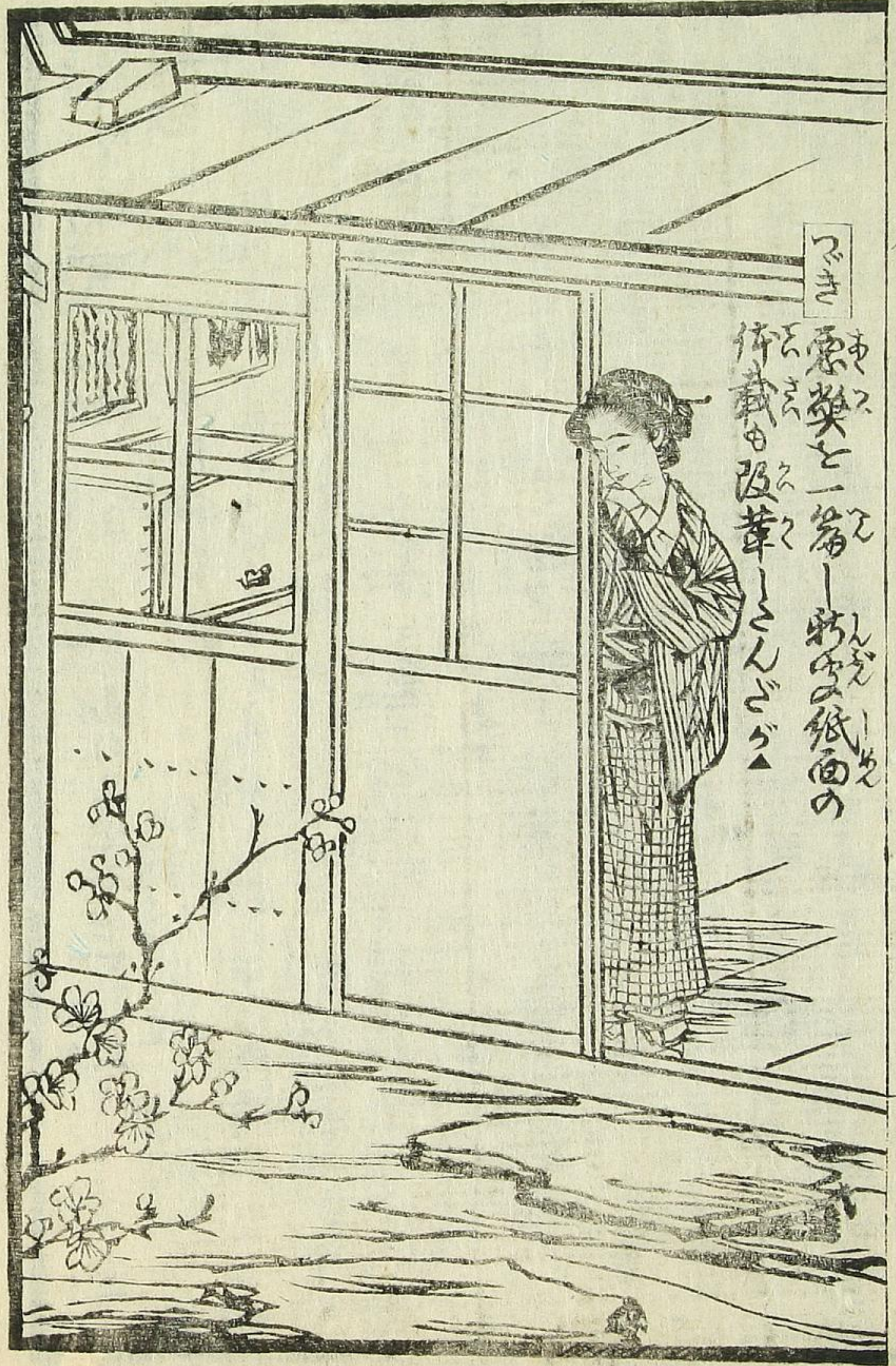
櫻雨迂叟戲編

第一回

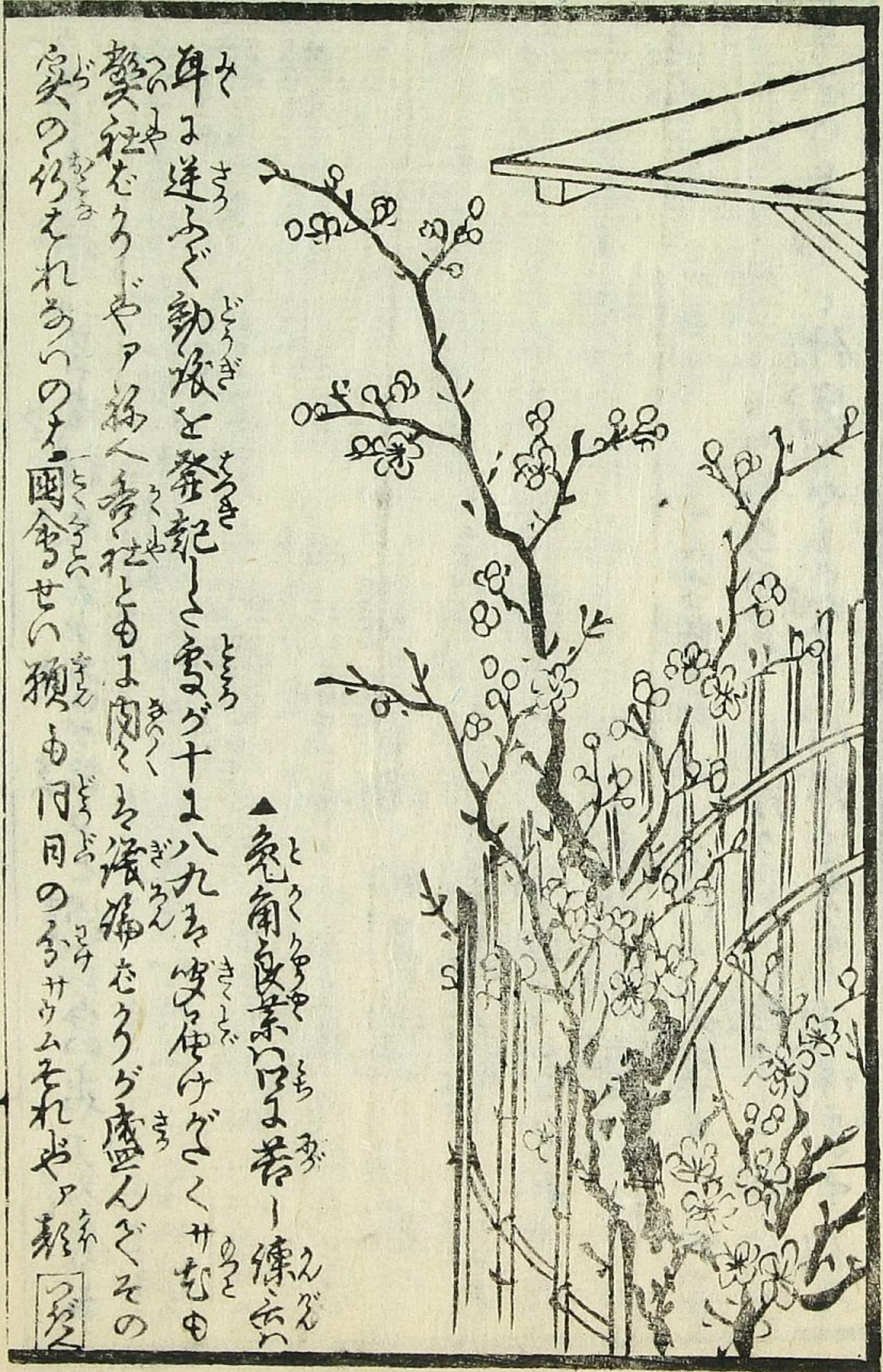
世の中を三日見ぬるは様多と云はれも事せし為迄のち細い方
今の世の中は自由なるは叶ひし穿ちと云ふん然実十餘年を
下世に於て港樓の流石も明治の時代の文藝の表裏ある親
睦交際を履け捨てる通釋の梅哀学の西洋流正美の流交交
の雅樂多交りの其の中は中みも辨理の叶ふは次は先弟一は都使
乳救百万里と一瞬は候と通は電伝機書天と花ぶ風船のれは
陸地とをる遊覧車や呼吸開けたり復化変う百鬼夜行の人情
世態幸活よ白蓮の女は且つ妙造の髪と切りたるは幅幅奪ふつ

徳義の所小の木の物少てなり打ち返す業物の膝切丸の平心せし
 麩ら下とせしせん同体体頭東京一子ヨシ曲天窓のあたしはね
 と近頃かき教養は彼の衣廊と一室一西洋造りの表がり波濤障
 子の用たんとするは椅子の設けたり窓は障子八角時辰を度る流し
 窓物の鹽も敷一丈飛ぶ燈の模様の文人画向の柳と氷船なりを側
 玉湯細網の棚ももえぬ客足の狭くも雲岩昇平の履沢との由良なり
 開へんかき座敷のなをせし一室稀多きは横濱開港から理髪しよ
 の名を流る新富町の浅衣の客とたより扱入のころ奇業よませし衣付
 客もあち今十二時迄五個の赤より上若種く極くの影も程よくある
 電燈のりおる入来る一個の窓をあけし一年の頃二十三日某位朝の
 一長年を色書白く象の下へ編製とせし都は梅先とて揺らつと居る

癖あり縁織の小袖は八丈の平着白のりをえまを肌着りて帯は赤
 水さちう袖の志なき羽織へ黒ちうめんの約付むも敷一丈飛ぶの
 後徳は仕立あがりとあらふやうむ午後九時の時代りといふ
 里路之し物のちのぎまへ東京云々と田舎館うかひか一交り文
 層天物の人物多し(辻人車と急ぐを浅衣の表と花下り乗南
 しく入り来る一且形か久しう入ッあやいし一以呂ハ暫時くてしね
 サアお掛なましまし一ア動と候し相度らむは盛文で結構は
 今日いふを静とせねア成程モウ下降り仕舞ッと知ッ丁舎親い
 陸梅と直とやうとせふうカム新聞の僕の子社やア昨年の梅
 獄野金よイヤ大関にサ行か社中が氏権連ごうう猶ともあると後
 と掲載しと那の梅末サあより我輩が聴せられたらと云ふ物の社中の



つき
原裝と一篇一紙の紙面の
体裁も改革とんごう



年々逆みど動機と登記とを又十一年八九を改定しけがくサむ由
契社をよりやア協く者社ともよ内々を撰編をうらぐ盛んぐその
実のゆえれあいのよ國舎せの類も同月のふサムそれやア
▲免角良業の口よ若一練云
つた

ときくろく紙シサウ成程是名ア学が号と運らるの由ア大層な
 物サまが僕らんぞの申村樓井生村で演説會と呼ぶし知が路分
 聽丸の耳目を驚かすやうな新編と吐くしるゝ氣なるものさツケ
 史とて学の証と論説と書と方十分は勝後後なる新編
 が出来るろく世人の意願と驚かす分サ保て新編の化者たる者ハサ
 胸中一万余の書と書へるの由アあるぞ書むろく演説と云つて
 新編が出来ろくおとア極く後文書り下通りや二タ通りと云ふ
 六十日書き通ふさ直にねてウムね後よまらぬア教あるものろくサ
 他人の如くぞ我輩が學んで來る如くア予一が英學まろく佛蘭
 西獨逸の學も亦やらぬの由ア辨理がろく物ごろく解くと
 王の學文と研究一やしとむも得意とまろくの法律學もろく是ハ

英學で眼と眼し政事學も佛國醫學も究理修身學もろくぞを
 固より獨逸が冠る物ごろく是は分て脳髓と痛めるを堂香
 の功と後と勉強もろくこの兵卒軍陣の學も做まんばと兵學
 へせ界分一強勇の國と呼ぶろく露國の學風と又器機と云ふ先
 法軍の律も分ちやア勿論軍器が專務サ僕らんぞが指揮する
 同やア予一せ那翁孫が共和政事の基祖と稱さるゝ私を東
 の方法も做つて十萬の兵も教ひぬるが人中の絶とも見
 ぬるも豪傑がろくつちやア仕方ろくサむも善くてもその色ろ
 韓任がろくまゝ英敏よりろく子房が見ぬるものと清公の大業も
 補助らんとぞ川竜先生則ち孔明でも蜀帝が見出しと云ふ然サ
 吾何ぞと僕の出しはろくろくからぬと云ふ絶が國てを色

氏は佛式練法に長くとりて居りては、何れも彼れも官軍の如く、
 機と浴まののゆゑ、是れも運天に任せ、戦争小及んとす、よき幕府の御下
 救万人の士族等、恭順抗戦の義、一決せ奉り、く、此日と後、さんとあると、
 するは、ひま、憤突し、恭順抗戦の巨魁、を勝て、房君を刺
 殺し、抗戦の勇士と、励まさんとせ、うと、果て、まゝと
 是と、止ま、る、運天
 突羽の地方、み、脱
 ち、一、日、志、と
 募り、隊、伍
 と、編、み、居、り、
 官軍と、憎、ま、せ



▲此の人物、
 士族の御下
 幕府の御下
 彼の

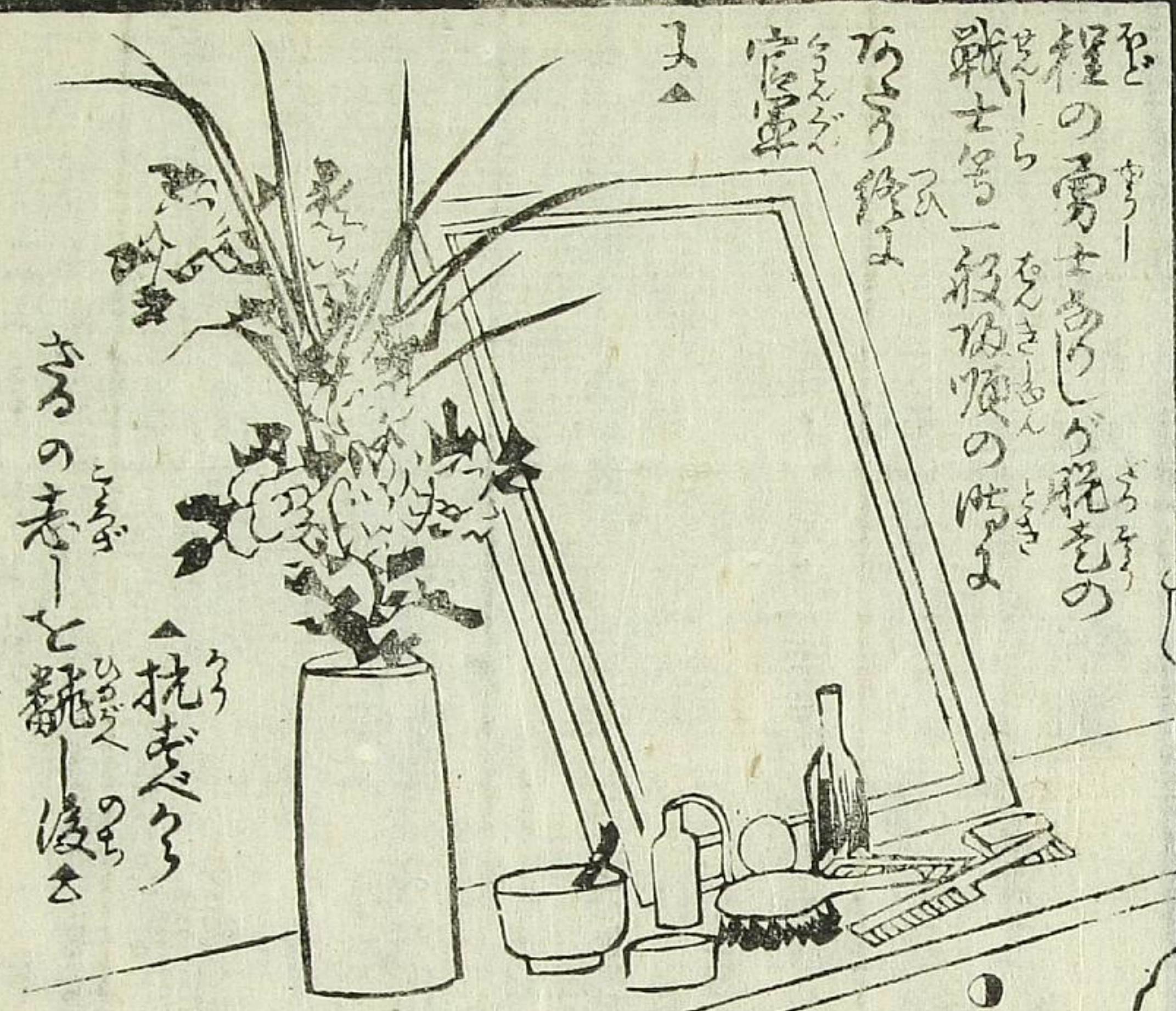
程の勇士ありしが、脱走の
 戦士等一般の憤の、
 ち、一、日、志、と
 募り、隊、伍
 と、編、み、居、り、
 官軍と、憎、ま、せ

▲此の人物、
 士族の御下
 幕府の御下
 彼の

佛式の練法を傳
 習し、明治二年の春の
 大義者よ、出仕し、續いて、司法
 省に、聘任し、洋行、掃部、の、ち
 元光院の書記官とあり

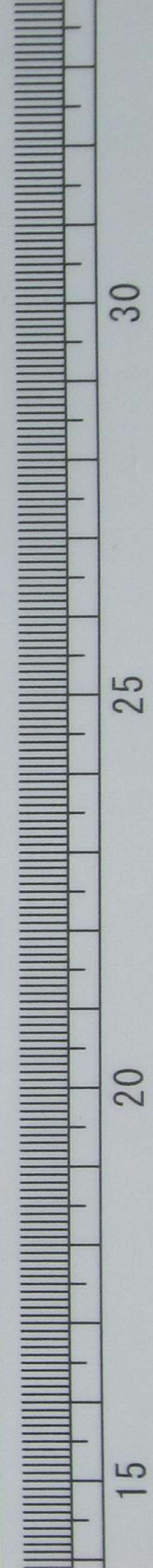
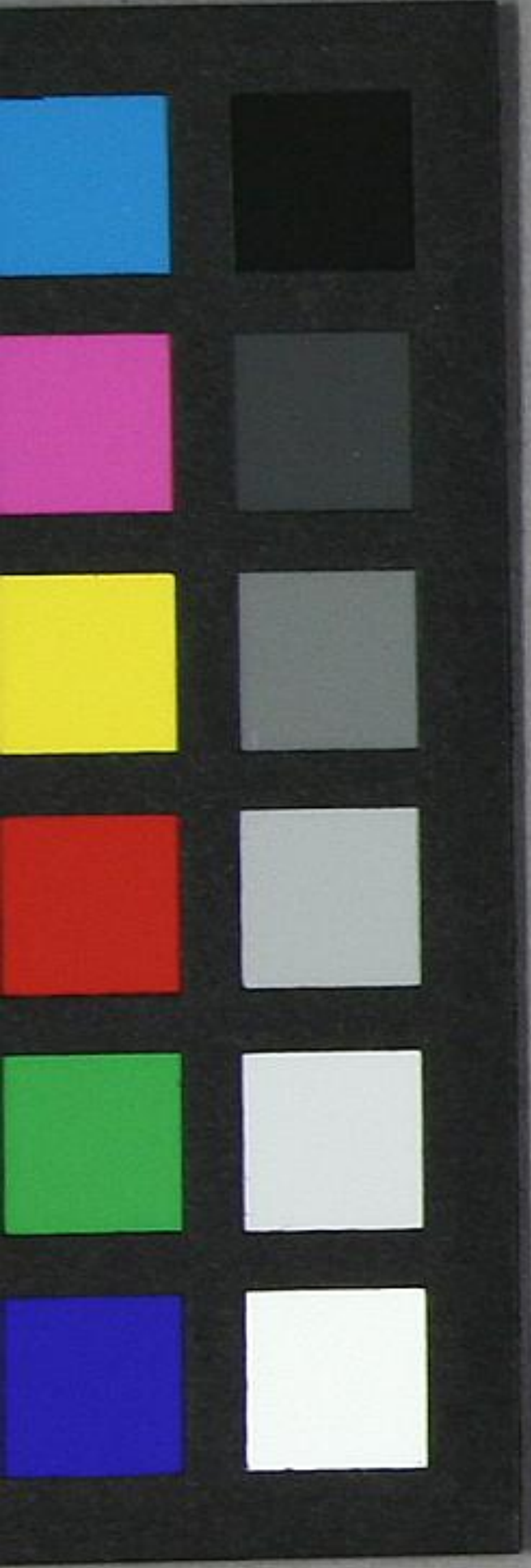
合園せざるより、此、後、
 群、一、嗚、呼、社、を、起、
 する、由、月、夜

ある、某、と、福、永、の



▲此の志、と、翻、
 後、ま





明治 東京 西洋床 初編中
餘澤

第二回

東京

櫻雨迂叟戲編

杉柄もも入来る其銀行の小管を生意気風の若者あり杉園
 紀者の側へ居り過ぐ入来る若人と死目よりけり及て茶を茶と香を香
 扱たると記者先生の道にさへ敵手入幸ひると得京顔もそ
 銀行の小管は高ひ一時先生も富家の屋敷に來除うねりア
 支書ア横濱以來の心得とありわろ是の威を實に天窓の何ぞ
 毛羽(淺茶)をやつて他店への中へ性やせん若者の利刀が細く利て
 何れをどのり別て仕業と知とありやうに指未サる程さう
 徳小由物と云ふか好もるさると生いたり雅の既し僕様も物安(次へ)

西洋

茶

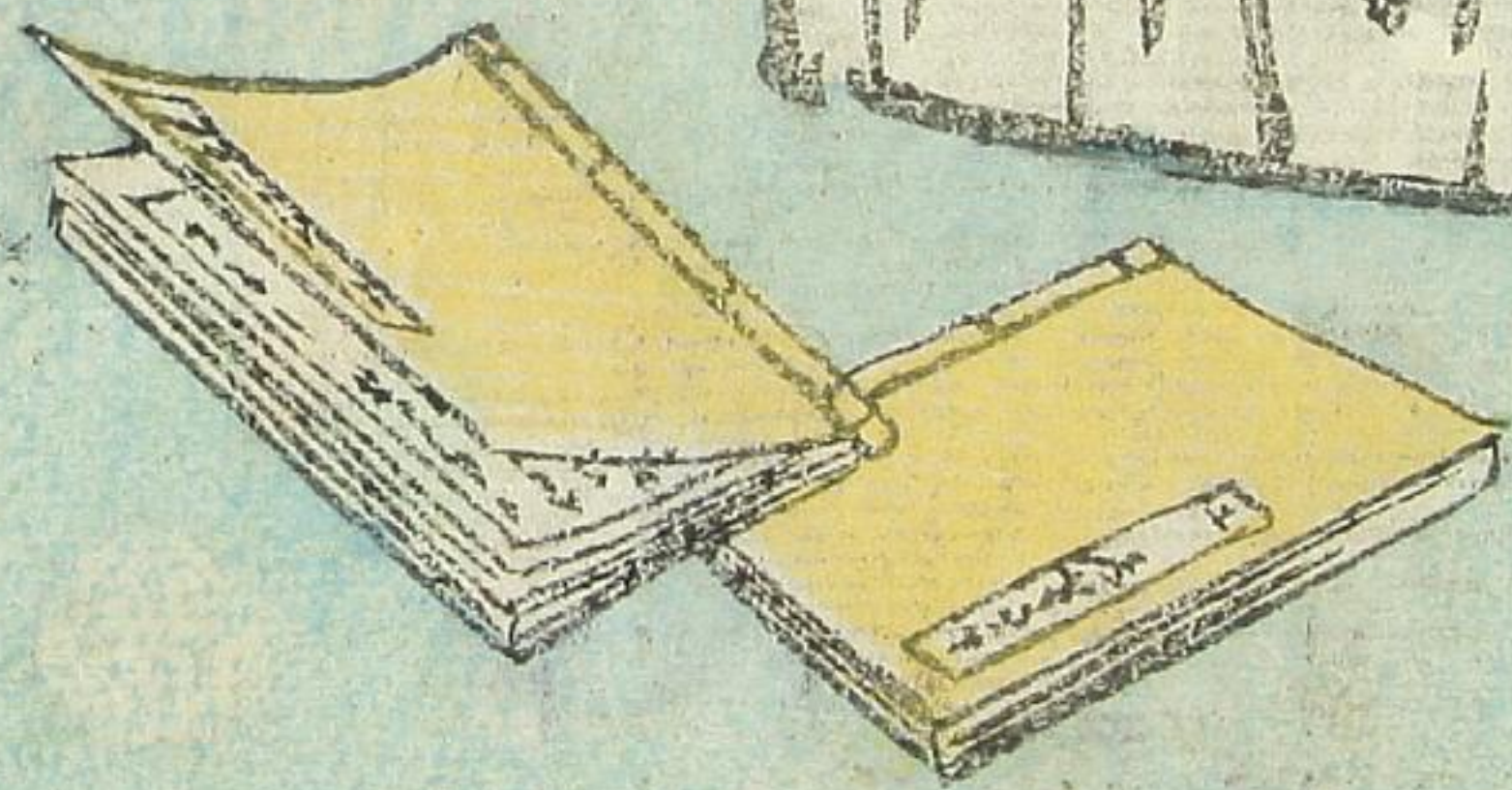
初篇 中の巻

櫻雨園綴

松

杉柄の光る画

茶



つきの論説家ごうう一個でもは得意の多分と在悦する分て
 たでせり小形勢の面うくあのとそは同意ぶうせ物史と因する
 ううハ大形勢の論説をまくッちやア懐んど知が益々多理屈廿ハア
 た極く和軟をか樂しむるさと感心せざるて致ハ人の心と性也天
 地とも動ろ目よふ之ぬ鬼神とも感せしむるといふ文が因事古今
 の序ふも判然とて幾し優した物と何ハ僕みんども形史記若とある
 限の由ア何事でも察まさればあうあいで初年の時うう因事の勉勵位
 やしと候しと學ふも種々の派義がりの第一が加義のま漢大人此大人の
 學風が偏固るにが勘あつて存む知がまはし開けこの日本居宜長ら
 トサガ教へ方よらつてハ居門造し平田法華と隨分感にも偶ッと物
 ぶ平田等風先生ハ博識多才玉釋しよふのみをらるぞとのハ編輯

の中と世に仍はして物サアア重國學文の順序とか尋問うやせう
 先我の重國の云業の圖とかつて神ッ代若ア文字といふハ一ツもなく只云
 業の通をせと國信で下ッて浪花の帯の沛代はもう文字のなが開け
 云業の格類し倣ひ文字と的と物が別ち國學の第一書と稱する
 日本紀古事紀万葉集と直なり然れども此中が同時代し出来このでハ
 るの日本紀ハ志賀の物の中物よりよつて余ハ親王が撰まれとこの中
 るれハ新舊の所は随つて先圖書し入學せんとあふら古事紀日本紀
 近世式合我解と格めし倣とを奇き云業の倣し思きを窺ひ粗要
 義と究めと知で被及し志まが順序ハ欽書といハハ万葉集うう二十一代の
 歌集文章若ア源氏物語竹取草津保物語とまといハ學ぶと然と因
 うり唯文章と傳在中ハ物語めと云ふ出めとの辨別がたりなり

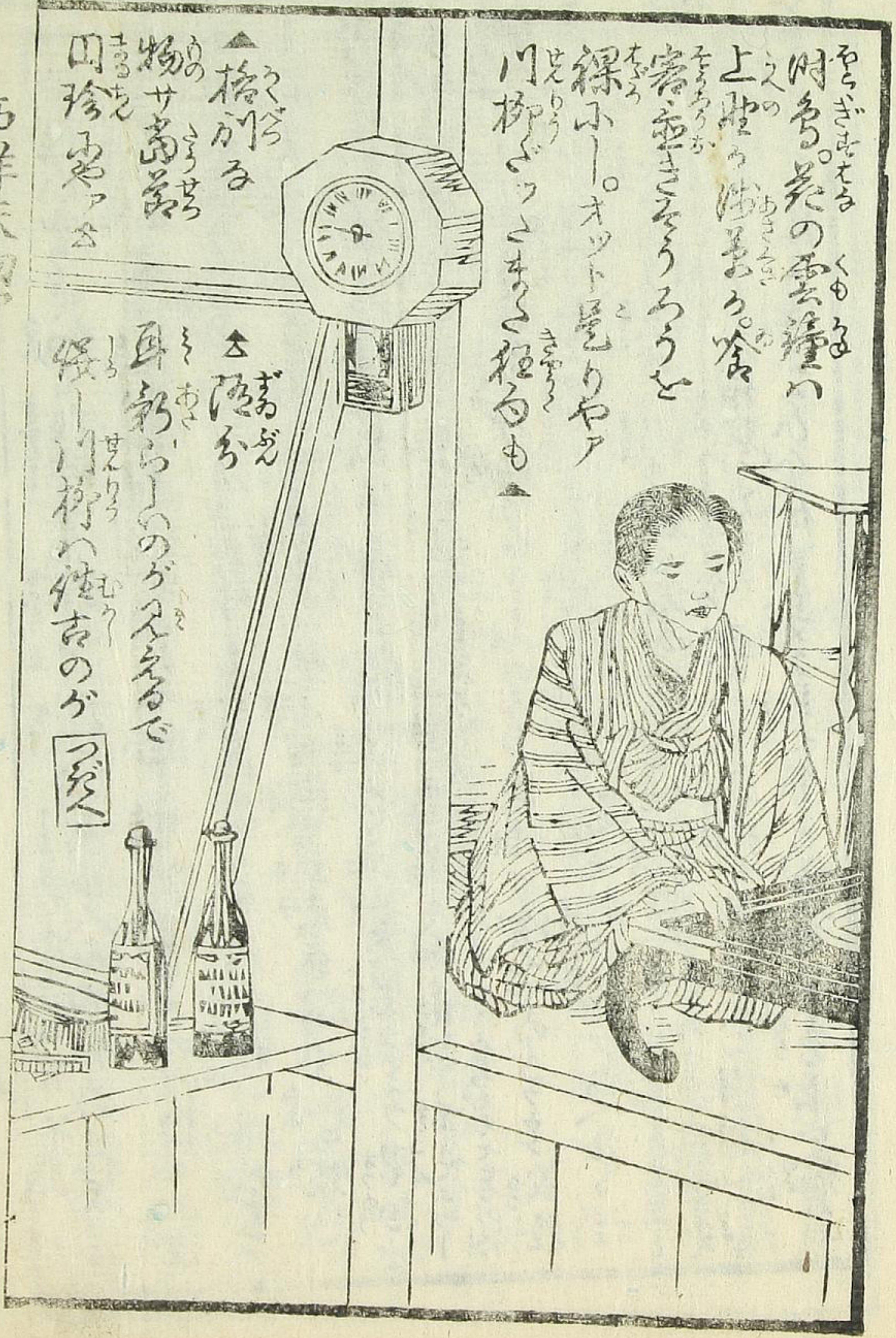
つて

是れを學問を志す隨つてかりやまらう別後一人の志を
 痛く病むやうな配入らるゝのかけや何處かの國
 學者と知りあはるとナまりやア而も水知で居るデ
 諸君の名家の筆知を東家下は格ちやア
 下宿の中居豊額
 先生ご
 らう是
 里やア學
 問もある
 初めよある一名ふ
 文
 本居大平うじの末



だうも頗る花書家サ
 ちも残さるゝの
 故人よあ
 是と進者
 先生ご
 款文章ともよ出来
 て文章以用掛りともるゝは
 先と今の知やア下宿の先生一個ぞらう
 未より僕が権知也で好よふまゝの贈書也
 ちやア本學は思ひつらざる云々ともものあらとな
 彼我とも腹脹するともく思ひ極め一書と國も一書せ也





西洋未初

ついで小給だつたが何しろ簿記法と洋算の二つを
 重んじやア銀の中におぼろぎき者ありとり腕まを
 派石よ改めたの眼鏡よ叶つてお精の糸に
 が迷ひなつた物ごう今トヤア可成な
 交類とよて月のうちふる香や
 七夜の株枝と扱めごうお
 トヤア囊中が痛むむどの
 袋もねのぞう室さうのそ入
 共まご成返つておるのな理でさう
 べきい交際ヨ既上飛日のサ支那
 の政府より信用金の借込がある



おのえ 物見え
 律よ 付よ
 小わア 並居る先
 生方の筆を
 せ浪沢君
 延よ一億万圓の
 簿算を

ので急い付らの金貸と
 開らるくつちやアあり
 ねと花柳の尻状とどど
 のラ速い日市の集落坊人
 物寄し知で支那へ風令の
 一億万圓と扱つて此利が
 一十年は何れも積つて何れとよ
 あるとふ徳義とあるごうあると
 舟一の浪沢君がからかやア遠ふ露合と善法は君で
 るくつちやア建も出来あつたと大勢の中七人擲の足
 出と事こので足免と尋るふふも然あぬ知ろ石板と



が借入わア
 貸し君の
 名義わア
 感服と今月
 の橋本と大
 義者ごも
 上申すると
 申すは用を
 勤め小歩く信
 ての事大書記
 官書ア僕が次へ

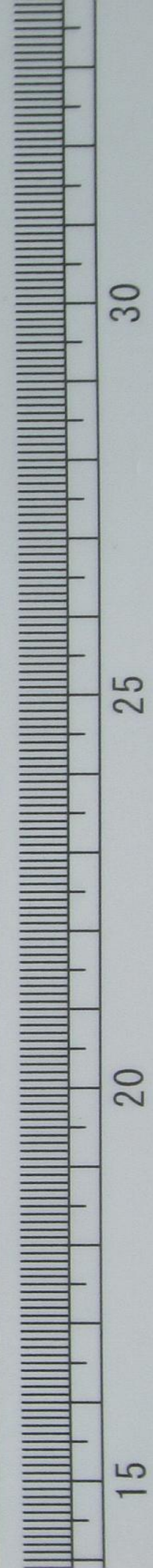
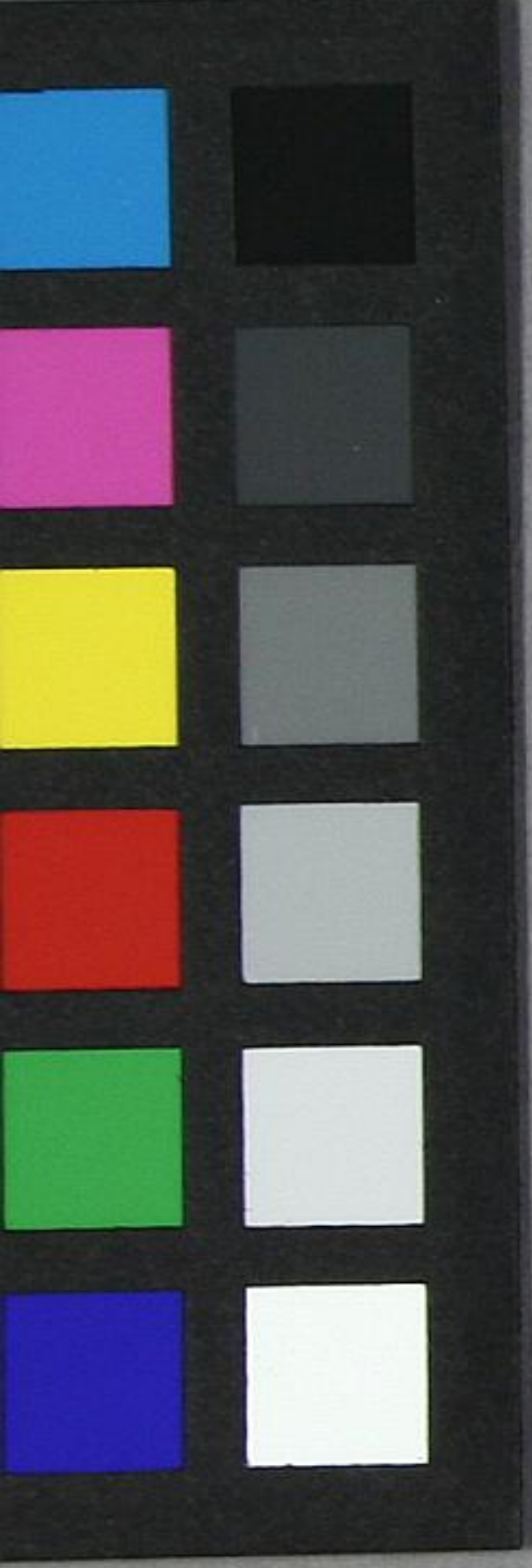
保元平治の乱... 後醍醐天皇... 足利三代義満... 豊臣秀吉... 徳川家康... 徳川幕府... 明治維新... 大正... 昭和... 戦後... 現代...

西洋床初編中巻終

近世新聞	綾重夜紋	夜嵐阿虎	夜叉譚	高橋四郎	水錦隅田曙	格闘伝	金文錦繪
三編	三編	五編	八編	三編	三編	三編	三編
大尾	大尾	大尾	大尾	大尾	大尾	大尾	大尾

010190513748





ついき 勲賞を命ずるの別ち高法行史の持湯どらう一丁目とて
 會の目も適をらちあアありやせん時よ花と此るのゆで格の執
 圓でりりやまアおびまさい随分なつて種で一番出来はつたか懸
 デ尖精ゆと愛トや一のサマア送でどごのやまト
 工師のちあるとと枝よ首をうろをまの込と物の其枝の中と
 の不開化のあでい懸来とか傳とあけ人好で増くあひが暮り
 突よ源平の少将トやアとせ人やせんが雪の降る夜も雨の一夜
 もデ西川岸の船宿うろにとうけ又或所へ捨物所の刺葉茶を
 うろ夫文を罷一圍の籠城を懸くと從給一と雨でりりゆ折枝
 く柳は風あらばささうその思をせ振よ且中もとてあうう此

凡八のさあま衡其重たは自分さるの口腕先で動凡八隨分
 佳ありさ者どらう林と園をてか樂とこの口腕向が其く種人好
 うろ此凡八は懸とか懸きあまうろ八雲もつ出雲八重垣要込りふ
 結ぶの神とあめめなる是地ともワンと何ぞと種も見て見る日
 よあつて観ると園より情けぶけ人生と付まの凡八はま物を是き
 色と源一のペケあせとやとをか懸とあんざアのひとと一でほしう
 とせ人やまをさまよ和とかかかせ中やせんと史込とまよとねたあ
 と源石を且船も若芳人サ凡八佳ひり表あア及びやせんとあ
 度橋は一田のペラグあ産の口煙テ使うろ考人やとね動あふ
 だんあまをさう那枝がウンと承知をあまどらうと凡そ一財
 間をう工史と懸一と浮んどろく表と送はやしやう

次へ

つぎ 丸への考人ぬア 那奴の連由

東京ぢやア 何う曰くが

何うて出来

おのど

と桑一

やを鬼

も角も

横濱へ下晩

何うとをいやと

彼地よあいつ十二分もと

働たとか目ふりたり



勤で表す

と高を

速物の

速云とある

と速くふ

血縁用と

きえは

トヤア明日との速き道は

是より速中と速えくを言がまのつりみ事勤で

然るよき知い為美との井ね先勤をの玉的が居

う居ねりやを言と袈袢と尋やとやうと



つき 目的と連なり西川岸の船宿を繰りまわしねア私の高う
 何れかまひやせんうか跡のあ方う遠き合合うが効をの味いぬ
 ぬれぬ知ごのものを授あんと授んばア居るは授

第四回

備寝ひやまとい獨ちやア落後家の口陳めくやうをまが西川岸へ
 込むるなる後同てえんとお経く只今といひキツカケて程なくカラ
 コロ ぞへい今日といひ黙いさやと先戦象の効でもささる程
 業の準備の調ごとと来たわろが凡八をうりやア戦ひの都合より授
 と付らとあやうきんとと授振が代つとあまると是れでも送りやま
 うらまると慮るうり是れ水産物も由淋しうと何ごらうらうら
 の女房さんもか交際をせんとまりやア方々知れ長る知らうらと

成へまだけ味方と将り集り魚川岸の生物ピンと一に利身りとも
 山菱將油で一杯杯ありてサア此際ひと授さば授見物と陣がれ
 と出しこのが丁度午前十時と時と四つとと思ふ制限十二時の風
 牽は後とちやア面をくねと女隊とせえと後押つたの宿車は繰り
 匠一やとステーションまで矢と射るごとく中等の熱海む由第丁の号
 の後び番寫よりやアはよむねかサ分のとと考へりやア不平由鳴れ
 やまめく于此授渡の本陣は何れよまる不第と授せとやアはつるをた
 一も二もねか倉持への第二階かの富貴標を將軍の宅でげまを
 とくか八の回初色でげまうら委細の授ふとチヨト身うちとあやまを
 ウンと考はとやとねか免も角も音と考めらるるやア是れ附刺をんで
 居るうら深羅とと然と海岸うら野毛山魯文さんの産物と授へ



てまき ちりちりア叔人
 まあつてちりちりてま
 う件けんの法はふと杉すぎ林りん
 見けん窓まど樓ろう張ちやうの序しよ
 と備びりやとと黄わう
 茶ちやと頂てい戴たいまきまき
 見けんあろしと茶ちやちり
 まき茶ちや茶ちやとの黄わうッ
 ちりまきまきちりやま
 波なみ是こゝまる周しゆ▲

△まいのとちりてまよ
 倉くらあしや
 したた
 まる
 と



▲腹はらの雲くもがグウと音ねを色いろと出でまはし朝あさに殺ころり
 やしとちりちりちりちり
 清きよと便べんりなる富ふ貴き梅うめへ飯いつくとと備びけの
 玉たま燈とう法はふらうみ固かたまり山さん海かいの味あじいふせたままおち
 列れつ品ひんてまきちりちりちりちり
 列れつ品ひんてまきちりちりちりちり

●何なに程ほどの
 ちりちりちりちり
 りとこのみ
 庭にわ邊への具ぐ具ぐ
 速はやとちりちり
 その庭にわ邊へ
 ちりちり

ついで

べき 湯ゆのとんで懸くと解とけやとね入流る瓦八が解解をまらう水
 も減らまぬ扱扱をやつとアイと備いせて焼いるの瓦尾と拵あげ
 まがらも漏れがグウとツを拵よあつてあんん拵うらうこも花を思ふ
 ひの下筋で骨折げ入るかでげまらうねん是をらが妙でげまサア
 糸のと石と事が洞のつこあで初進要目の熱投気が胸を患ふ
 ツと下の腹が大層痛むとらうらうの糸を拵の通口とまこと
 患ふこのを思ふまでよあつてこうらねんお腹の痛むがわり熱投
 と志ねん十人の氣と知らぬあのみも程があるせんぞと思ふをらひ
 生まとねんんその夜の熱のもが患くあつてモウそんこツちや
 アあののをまヨおまよ二合の日らいこうう助けとあつて後進をま
 りら寶丹でも神薬でも拵せて頂裁せつを死みさうでまヨとあふ

考の二合が只やつねんと思つて居るとサア大腹下とあつて朱
 ねん考場へ性とらうらうを晩の九時はらう夜の引ぬらうまで
 ざらとサに又夜も通ひやらうらう此強きみかりらうと者の保る處の
 りやアわかレ症痛と擦やら腰湯のを傳ひて二階うら下進まを百
 夜のと床には拵あらうち夜智を半病人テ初進の花五ハソツ
 的がたら是のみら際際の教殿筋サイヤ大変な強動でしとせ実は
 寫實樓が用業以降の大隊固志う幸ひのりあらア傳深病の流
 仍らあの此をか合せせと思ふと善治め避病院へもかつた込む強
 ぎよあらうやつサらう一つは是名ア新同随分かま入さんの
 世家名ア教科由奇候ハらうどらうグ送なのハ別帳どらう此
 一つ好ひ天帝ど道邊を知れ人出るらあらア好と解まる一つ

「きき」家くもるー「世」係ふもよりとせ入

やまね外産の梅いも堅いさうで

まらう菊鳥のア笑ひひみやーと

うら蔵茶

のゆやア

忍もで

げまらう

二人家の

変任事でもあま

橋向ふスツと



のろこ

茶の茶

やまらう

射衣は結一の袋と

後よりそ之圃の永機宗道の筆巻と書信れ

成程今日の日でげーやうを如て為茶の

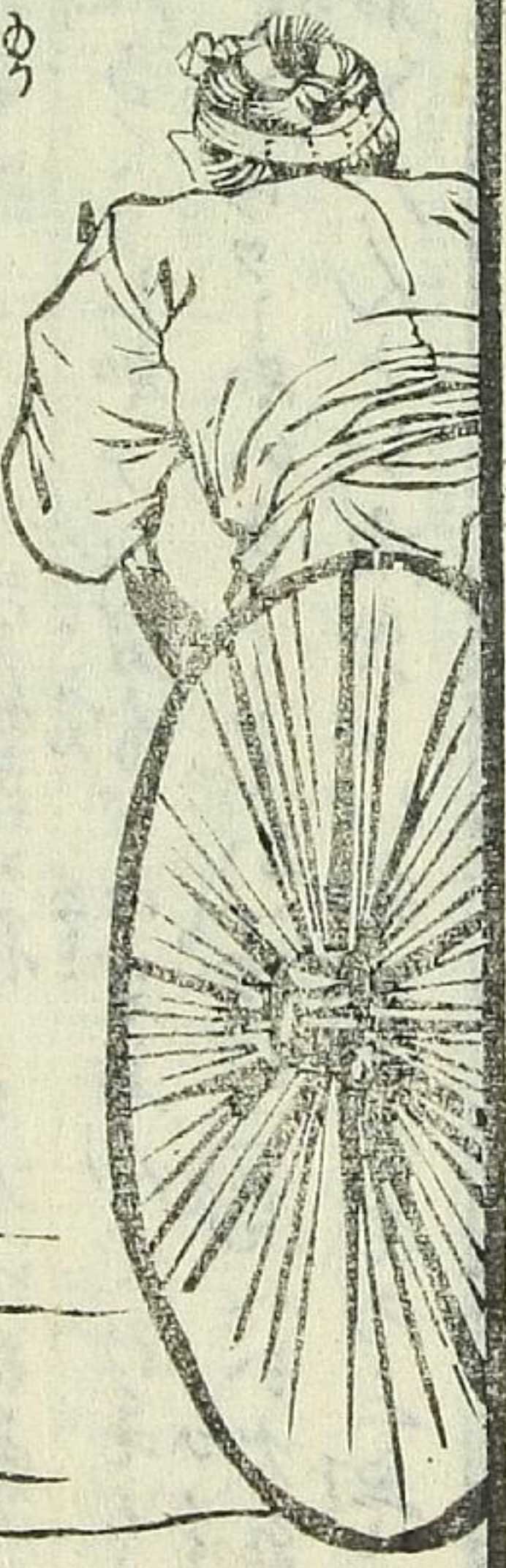
一服も頂戴しー菊鳥の梅兄とアぬ何でげまら

園よりちを種さぬ子万端尻公がおぬまぬぬぬぬの

風流遊びのりとも飲ぎ合おやアぬ入やまらう

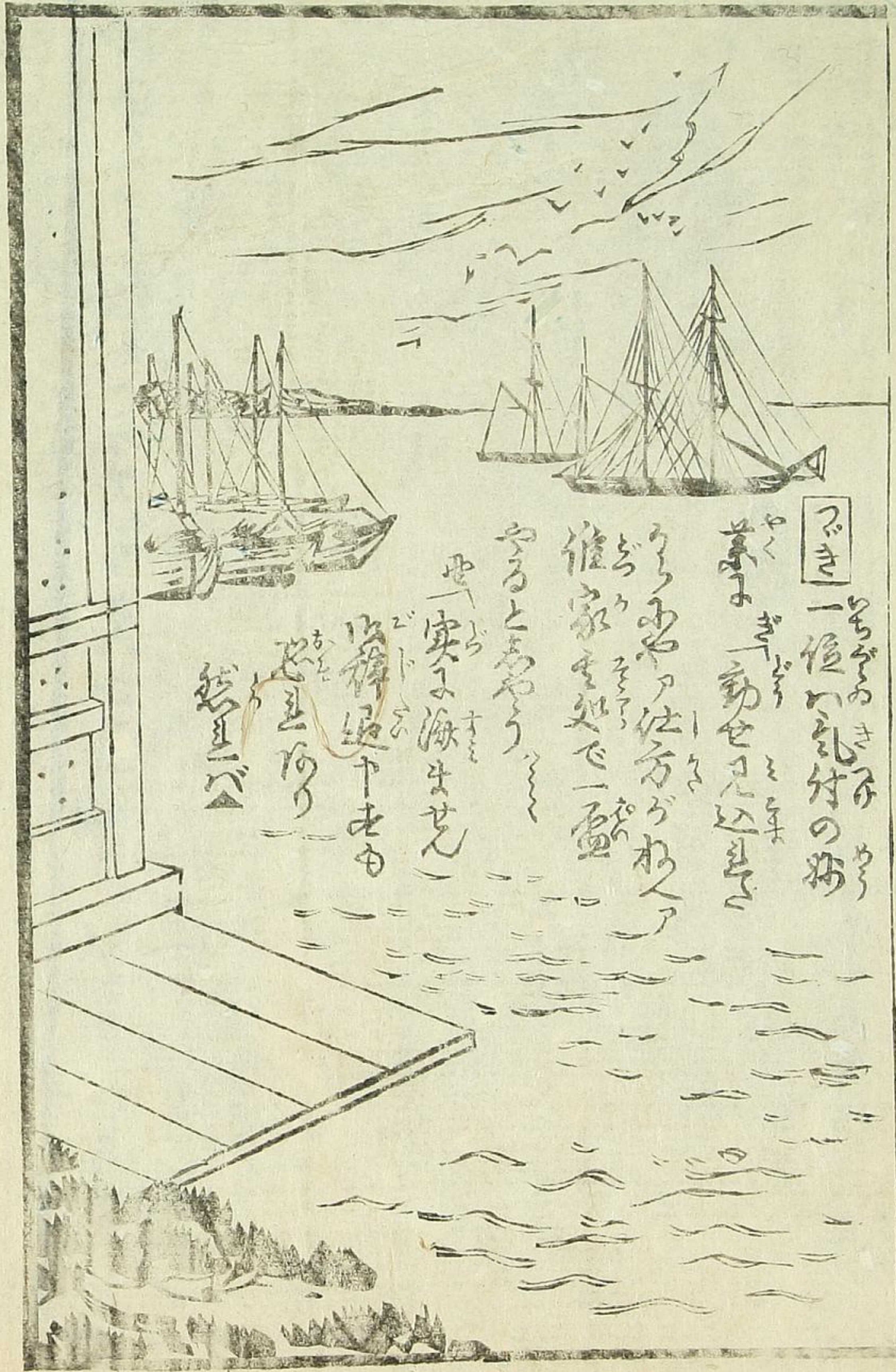
柿の住ひ如をぬーとらう千ヨイと向ふ越一の山新向のふ水か

うねう二塘がア別産は教杖へ入りやせん青るんぞア日本橋産とぞ次へ



さき くら物ツもろろろ 白鼻よ喰ッ付て居るデ白ひと喰の由内免ど
探と大層よ吹きまをまなまりやアちあつと 濠洲のデー猪につけ
ままやうとろろを向ふがろて申者でげさう必お返おとあや
まねると面白可笑浮且目で移し 瀬南ひをえ移めそと乃移
源根信ひは縁出やア雑作もね一足飛でけま廓へあつ込ら
えくい物でも後しやまなまりやア花金のめ人でまが濠と鳥雲を
墨とも搔濁しと思入は兼来互腕まを以後よ入とやま後し
美玉のい梅屋の雅とマツとが別深の移り文句でお茶屋も七軒
でげあやうたるくツちやア内分が内分ぶんでげまろろ花金
あやうく佳く入らッやいましとか福か二階へか火辨生どお
まへうろ依余とたんとか次ぎヨお布巻ハ契のとまよ何るヨ

紙ひ久サア花金か何げんみまみねん尻ちちん申サア何げり
まど目や花金とまデげまが内用多のデげあやうまあまを
あまいでもまねまがも紙ひ家が何ろやまア先濠泉へ下
ふして万安のなを紙のぞりまをまとも毒英屋あつお命を
家も屋信ひ万く花金のほとあ入りまなまらう今ナニまく付
内用もあつまは紙屋かね紙屋の松田も悪くは異人やせん
紙屋の紙の紙屋を頂戴し一たり紙屋の紙屋の紙屋の紙屋
がろて松田のおろろやア外分がえつともねん 一たまくツちやア
の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋
かくあるちやア寧ろ紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋の紙屋
内いそ家のと冷う外分ア喰ませんねんむも昔ま由佳ひ紙屋



一後ハ付の御
 業ノ一動セハ込込
 うらあハ仕方ねえ
 誰家生知で一
 ちるとあやう
 一実ハ海生見
 以神返下ま由
 然且ハ



一お供をのりや
 ありう親る
 かうでま西一雨よ

一ちとろと花を
 甘ア系うまあやう
 一あゆぎんりのま
 一あゆぎんりのま

つた

